黄庭堅子瞻帖

①子瞻堂々、出於②峨眉、③司馬班揚。

子瞻堂々、峨眉より出で、司馬班揚たり。

④金馬石渠、閲士如墻。

金馬石渠、士を閲すること墻の如し。

上前論事、⑤釋之馮唐。

上前に事を論ずること、釋之馮唐たり。

言路以為⑥階、而投諸⑦雲夢之⑧黃。

言路以て階と為り、諸を雲夢の黄に投ず。

⑨東坡之酒、赤壁之遊、

東坡の酒、赤壁の遊、

嬉笑怒罵、皆成文章。

嬉笑怒罵、皆文章を成す。

解羈而帰、⑩紫薇⑪玉堂。

羈を解きて帰す、紫薇玉堂。

子瞻之徳未變于初、

子瞻の徳未だ初より変ぜず、

而言之曰元祐之党、[12]
而して之を言いて曰く元祐の党と、
放之珠崖[13]**儋耳。**
之を珠崖儋耳に放つ。
方其金馬玉堂也、
其の金馬玉堂に方りては、
不自知東坡赤壁也。
自ら東坡赤壁を知らざるなり。
及其東坡赤壁也、
其の東坡赤壁に及ぶや、
不自意其紫薇玉堂也。
自ら其の紫微玉堂を意とせざりしなり。
及其紫薇玉堂也、
其の紫微玉堂に及びてや、
不自知其珠崖儋耳也。
自ら其の珠崖儋耳を知らざるなり。
九州四海、　知有東坡。
九州四海、　東坡有るを知る。

東坡帰矣、民嘯且歌。

東坡帰し、民嘯き且つ歌う。

⑭一丘一壑、則無如此道人何。

一丘一壑、則ち此の道人を如何ともする無し。

東坡先生自作小像、

東坡先生自ら小像を作り、

笑以示庭堅曰、

笑いて以て庭堅に示して曰く、

余一生事将在君矣。

余一生の事将に君に在らんとすと。

堅不敏敢不応命、

堅不敏敢えて命に応じず、

適以謫居⑮涪**州、**

適たま涪州に謫居せるを以て

距今一年、未遑奉答。

今を距つること一年、未だ奉答するに遑あらず。

偶走筆成詞、

偶たま筆を走らせ詞を成し、

書以質之先生、

書して以て之を先生に質すに、

不審於先生之意有当乎否。

先生の意に当たる有るや否やを審らかにせず。

江西黄庭堅謹賛并書

江西黄庭堅謹みて賛并びに書

昔[16]文節公書生峭豪宕於[17]宋四大家中寔推第一。

昔文節公の書、生峭豪宕にして宋四大家中に於いて寔に第一に推す。

曾[18]文正有言無論詩文書翰、但従山谷入手、

自無甜熟之病。此坡翁象賛得以属公、

固知非公莫能稱意者。

曾文正言える有り、詩文と書翰とに論無く、但だ山谷より入手せば、自ずから甜熟の病無し。此の坡翁象賛、得て以て公に属す、固より公に非ざれば能く意に称う者莫きを知ればなり。

両賢契合借出処、発攄才藻、

両賢契合して借出する処、才藻を発攄すれば、

焉得不工。較之恒常酬応諸作、尤見精采。

焉くんぞ工ならざるを得ん。之を恒常酬応の諸作に較ぶれば、尤も精采を見る。

其人其文其書、足稱三絶。初蔵[19]松雪斎中、尋入内府、

其の人其の文其の書、三絶と称するに足る。初め松雪斎中に蔵し、尋ねて内府に入り、

後帰[20]項氏天籟閣、幾経輾転、近為[21]蒋蓬史廙訪所得、

後項氏天籟閣に帰し、幾たびか輾転を経て、近ごろ蒋蓬史廙訪の得る所と為り、

其■嗣潤清司馬、与余邂逅[22]鄂渚、因得借観、

其の■嗣潤清司馬、余と鄂渚に邂逅し、因りて借観するを得、

摹勒以伝名跡、並誌墨縁。

摹勒して以て名跡を伝え、並に墨縁を誌す。

光緒乙巳鞠秋銭唐[23]諸可権

光緒乙巳鞠秋、銭唐、諸可権

注

① 蘇軾字子瞻
② 峨眉山　四川省の山名
③ 司馬相如　班固　揚雄のこと。漢代の文人。
④ 金馬門石渠閣　当時の宮中の建築物の名称
⑤ 張釈之と馮唐　漢代の優れた臣下（史記列伝）
⑥ 階は契機、端緒のこと。
⑦ 楚国地方　今の湖北省
⑧ 黄州　楚の地名
⑨ 東坡　蘇軾の黄州の謫居の東にあった堤
⑩ 中書省の別称
⑪ 翰林院の雅称
⑫ 旧法党をそしって呼んだ名
⑬ 蘇軾が流された海南島の二つの県名
⑭ 俗世を離れた境地
⑮ 黄庭堅が流された地名
⑯ 黄庭堅の諡号（おくり名）
⑰ 蘇軾、黄庭堅、米芾、蔡襄のこと
⑱ 曾国藩（一八一一〜一八七二）
⑲ 元の趙子昂の斎号
⑳ 項墨林　明代の収集家
21 未詳
22 地名　鄂州とも
23 未詳